

第一部

世界を莊嚴する道

「現成公按」私積

はじめに

仏法とはなにか。

それは理論ではなく、人の生き方全体ではなからうか。

沢木興道という一人の禅者の生き方は、幼いキリスト者であった私をも打った。長じてキリスト教の信仰に苦悶していたとき、この人が私の闇の唯一の光となり、遷化直前の出会いが、私を死の淵から救った。

坐禅とはなにか。

それは自分をやめにする身心のいちばん安楽な姿ではなからうか。

ずっと幼い日、父は戯れに坐禅の形を教えた。大人への踏み段を上がり切れず、気持ち揺れ動く時、私はひそかにその真似事をした。不思議にこころ落ち着くのであった。

悟りとはなにか。

わたしを虚無の闇から救う唯一の確かなもの。

キリスト教信仰を見失って「本当のもの」に飢え渴いていた私を、『しょうほうげんぞう正法眼蔵』のことは十分理解できぬままに、確かな

手ごたえで私を満たした。そのことばの源にそれはあるのだろうか。

だが、仏法とはなにか。

坐禅とはなにか。

悟りとはなにか。

打坐に参じて二十有余年、あらためて自らに問えば、答えに窮する。

たくさんの禅の書物が出版されているにもかかわらず、また禅が欧米の思想家や求道者からも注目されているにもかかわらず、やはりたいの人の人にとって、これらは一向に明確でない。

ところで、坐禅や悟りには歴史的に大きく異なった二つの実践・理解の流れがある。

ひとつは臨済宗の流れで、坐禅をしながら、古来の禅師の言葉である「公案」を参究して「見性」という体験をし、だんだん悟りを深めていくいわゆる見性禅であり、何百という公案の階程と組織がそれぞれの師家の家風としてある。

もうひとつは、曹洞宗の流れであり、悟りをあえて求めないで、ひたすら坐る行がそのまま悟りであるとするいわゆる黙照禅であり、日本では道元によって綿密な清規の行と一体のものとして伝えられ、また彼の多くの著作によって思想的に練り上げられた。

だが、見性禅に関していえば鈴木大拙などの諸著書があり、中国の禅語録集「碧巖録」^{へきがんろく}「無門関」^{むもんかん}などが提唱されているにもかかわらず、基本的には、密室で行われる入室独参（公案参究）によるため、師家によって仏法の理解はまちまちであ

り、また一般の人には知るよすががない。

曹洞宗においても、『正法眼蔵』のほか多くの道元の語録・著作があり、その現代語訳もあるのだが、その言葉があまりに難解であり、宗門の伝統的注解書でも現代の諸注釈書においても、道元の伝えた仏法は説得力をもって示されてはいない。まして両宗派の異同等もいまだきちんと検証されていない。

私はたまたま、『正法眼蔵』に触発され、道元門下の沢木興道師に出会った。沢木老師遷化後、遺弟の方々に育てられ、門下の内山興正師にしばらく、酒井得元師にながらく、その『眼蔵』提唱を聞いてきた。また縁あって、学問として柳田聖山、上田閑照両師に教えを受け、いささか臨済の流れも聞くことになった。そしていわゆる黙照禅といわれるものに、必ずしもうなづけなくなった。

ひるがえって現代を照顧すれば、見かけの繁栄の陰で様々な生命破壊がもはや修復不可能なまでに進んでおり、ひそかに地球生態系・環境の死を、そして人類の死を予感せざるをえない状況にある。

だがまさに、ブツダ・慧能・道元・興道と伝えられた道は、キリスト教世界に行き詰まった私を、そしてちいさな私にも凝縮された現代の行き詰まりを超えうる、真実たしかな道であるはずだ。

どうして人は行きづまったのか。どのように、どこへ超えるのか。

答えに窮してばかりはいられなくなった。

いよいよ仏法とは何か、打坐とは何か、悟りとはなにかを、みづからの言葉をもって問い答えざるをえなくなったのである。

しかし、それをどのように言い得たところで、それは言い得たに過ぎない。

道元は言う、

「『仏縛』といふは、菩提を菩提と知見解会する、即知見、即解会に即縛せらるるなり。」

「切に忌むらくは、領念することを。」

仏法とはなにか云々ということは、ついに私の生き方全体で答えなくてはならない。その生き方において、私はもちろん多くの諸師にはるかに及ばない。私が本当に為すべきは打坐・聞法・道得を離れないこの生き方全体の変革である。そしてこの生き方はたんに私一人の生き方ではなく、同志（僧伽）の生き方であり、宇宙万物の生き方であるはずなのだ。

これはそれを求めての、とりあえずの第一歩なのである。

さて、仏法とは何か、悟りとは何かという問いに対する接近はさまざまに可能であろうが、辿ってきた道を鑑みれば私にとつては、道元の指南によるのがいちばんふさわしいように思われる。だが道元の答え（法）といっても、たとえば『正法眼蔵』（以下『眼蔵』と略す）のどの巻をもってそれを見定めたらいいだろうか。

『眼蔵』は旧草とよばれる鎌倉行化（四八才）までの七十五巻と新草十二巻その他からなっている。新草は旧草のたんなる増補再編版ではなく、旧草を「皆書改」みなかきかへためる予定の百巻本の草稿であろう。いま新草と旧草の違いをつぶさにする暇はないが、ただ一つだけ指摘すれば『眼蔵』以前に書かれた『弁道話』において坐禪が他の行から峻別されて「仏法の全道」と

されたことを、旧草はそのまま継承しているのに対して、新草では坐禪以外の行すなわち出家・受戒・袈裟受持・帰依三法・供養諸仏等が過去・現在・未来に亘る仏因仏果として称揚されており、打坐は一生不離叢林そうりんという出家修行生活に吞尽のんじんされ没蹤跡もつしようせきとなつている。道元の言語表現がなぜ、どのように変わったかをたどることも、道元の仏法をあきらめる大事な道であろうが、まずは盛時に心血を注いだ旧草を見るのが妥当であろう。

旧草の中でも初巻の《現成公按》は、したたかな重みをもって劈頭におかれている。なぜなら「現成公按」という語は旧草中十七巻二十五回使用され、「現成」は旧草中、実に六十三巻におよび頻度は三百回以上である。旧草『眼蔵』における「現成公按」の根本語の地位は動かしがたい。ところが新草本や年代不詳本においてはわずかに《袈裟功德》に一度「袈裟現成」と使われるのみで、ふつつり消えているのは、道元みづからが晩年には意識的に否定した用語なのかもしれない。

ともあれ、七十五巻本『眼蔵』の根本思惟を究明するのに《現成公按》はまず取り上げるべき第一の書であろう。

《現成公按》は奥書に「天福元年（三十三才）中秋のころ、かきて鎮西の俗弟子揚光秀にあたふ。建長壬子にんじ（五十二才）拾勒しゅうりく」とある。「拾勒」とは拾い勒あちめるということで、一般に欠本であったものが、この年に収録されたと解釈されてきたが、七十五巻本が初巻なしで編集されたとは考えがたい。むしろ建長四年に再治され、七十五巻本におさめられたと考えられる。すなわち拾勒とは、改訂のことであろう。なぜならこの巻は思索の結晶ともいべき密度の高い文体であり、推敲し抜かれたものであることをしのばせるからである。

ところで、《現成公按》の注釈書は、おそらく『眼蔵』の注釈書でいちばん多いにもかかわらず、諸釈の視点は全くばらばらである。伝統的解釈といわれるものがすでにさまざまな傾向をもっており、宗門の解釈もそれらのいずれかに大きく影

響されている。いっぽうでは只管打坐とは趣きのことなる見性を期す禪の立場や、あるいは老莊思想や現代哲学の立場、さらには文化人類学などからの解釈もなされている。つまり〈現成公按〉の真意はいまだ不透明なのである。このような『蔵』解釈の状況は、私の聞法の状況でもあった。それゆえ伝統的解釈、新解釈をやや詳しく吟味しながら、道元の示そうとしたところを尋ねていきたい。

《現成公按》巻を、いま次のように十二段に分ける。

- 一段 「諸法の仏法なる時節……おふるのみなり」
- 二段 「自己をはこびて……仏を証してもてゆく」
- 三段 「身心を挙して……一方は暗し」
- 四段 「仏道をならふといふは……長長出ならしむ」
- 五段 「人はじめて……本分人なり」
- 六段 「人、舟にのりて……道理あきらけし」
- 七段 「たき木……いはぬなり」
- 八段 「人のさとりをうる……辨取すべし」
- 九段 「身心に……しかありとしるべし」
- 十段 「うを水をゆくに……かくのごとくあるなり」
- 十一段 「しかあるがごとく……可必なり」
- 十二段 「麻谷山……参熟せり」